The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アメリカにおけるアイルランド系新移民の諸相 : 文学・映画作品分析
Author(s)	小木, 麻里子
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58297
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【3】

氏　　名	小　木　麻里子（おぎ まりこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　24133　号
学位授与年月日	平成22年6月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学　位　論　文　名	アメリカにおけるアイルランド系新移民の諸相－文学・映画作品分析－
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　ジェリー，ヨコタ （副査） 教　授　木村　茂雄　　教　授　森　　祐司

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は，New Irish（以下「新移民」）という呼称をもつアイルランドからの新たな移民に着目し，文学と映画にみる新移民表象を中心に分析することで，アイルランド系新移民の様相を包括的に考察した学際研究である。

新移民は，アイルランドの経済不況を主な出国要因として1980年代に生起し，アメリカへの移動は1990年代前半を最盛期として2000年を迎えた頃には終息した。アメリカの現代移民の人口のうえで新移民はマイノリティに該当するにも関わらず，既存のアイルランド系アメリカ社会へアイルランド系文化とアイデンティティの再構築の契機を与えたのである。まず，序章では，New Irishと「新移民」という語がアイルランドからの出国移民(emigrants)およびアメリカへの入国移民(immigrants)双方における新しい移民を指すことに言及した。

新移民が既存のアイルランド系アメリカ人(established Irish Americans)である「旧移民」と一線を画す「新」移民であることを例証するべく，第1章では，アメリカにおけるアイルランド系移民史，アメリカの人種・民族の言説を踏まえ，現代に至るアイルランド系アメリカ人の同化，エスニシティ，アイデンティティを概観した。

第2章では，社会学を中心とする先行研究と統計資料を元に，高学歴・専門職，非合法移民を新移民の社会経済的特徴として挙げた。なかでも，非合法移民の新移民主導による非合法移民救済運動IIRM(Irish Immigrants Reform Movement)が，アメリカの移民法改正を実現させたことに着目した。

合法化運動は，新旧移民が一つのアイルランド系社会として一枚岩になった例であるが両者の接触は互いの差異を意識させ，新移民は文化事象と文化表象において自らのアイデンティティを強調していったのである。その代表例が，第3章で扱ったアイルランド系の祝祭であるセント・パトリックス・デイ・パレードにおける同性愛者の新移民の参加をめぐる新旧移民の衝突であった。新移民を中心とするアイルランド系の同性愛者団体ILGOの手記と新聞記事などから1990年代のパレードを考察することで，同性愛者の新移民の存在と活動が，アメリカのセント・パトリックス・デイの意義を再考する契機となっただけでなく，パレードの多様化を加速させた転換期となったこと，さらに他の民族のパレードへも影響を及ぼしたことを指摘した。

新移民と旧移民の差異は，パレードにみたセクシャル・アイデンティティの問題だけでなく，新移民を取り巻くグローバル化した現代社会にも見出せる。第4章では，移動手段の発達と通信情報技術の進展によって，アイルランドとアメリカを飛行機で頻繁に往復する新移民の移動が「コミュート」(commute)と称されることを挙げた。また，電子メディア社会に生きる新移民にとって，アイルランドが即時性と即場性を有する場と化していることを新移民のエッセイから読み解いた。現代社会の利便性を享受している新移民ではあるが，「ホーム」との間に心理的な距離が生じていることも事実である。

新移民のコミュニティはアイリッシュ・バー／パブを中心に形成され，労働ネットワークとしての場だけでなく，新移民文化の発信の場としての役割をもち，「アイリッシュ・ブーム」の一端を担った。また，新移民世代がアメリカに適応しやすい理由として，既存のアイルランド系コミュニティの存在だけでなく，アイルランドにおいてアメリカ人や文化に触れる機会があったことに言及した。

第5章および第6章では，これまでの章で通観してきた新移民の様相が，文学作品と映画作品においてどのように表象されているかを「新移民作家」，「新移民映画」として定義し作品分析を行った。新移民をテーマとした現代小説と現代映画に共通する設定は，ニューヨークのアイルランド系地区に居住し，アイリッシュ・バー／パブをコミュニティの場として，建設現場などで働く非合法移民，同性愛者としての新移民の姿であり，第2章から第4章で挙げた新移民の特徴が表象されていることがわかる。

第5章では，現代小説に焦点を当て，コラム・マッキャン(Colum McCann)，ヘレナ・マルカーンズ(Helena Mulkerns)，アイダン・ハインズ(Aidan Hynes)，エマー・マーティン(Emer Martin)，イーモン・ウォール(Eamonn Wall)といった新移民の作家とアイルランド系アメリカ人作家トーマス・モーラン(Thomas Moran)の小説7作品を考察した。作品には，非合法移民の新移民の主人公が，移動や「コミュート」をポジティヴに捉え，国，ジェンダー／セクシュアリティなど様々な越境を果たす様子が描かれていた。同時に，移民としての疎外感や孤独感，そして心理的に生じるアイルランドとの距離が表象され，移動，移民となることへのネガティヴな側面も描かれていた。

「新移民作家」の定義に関しては，新移民の作家をアイルランド人作家や現代作家と捉えることの妥当性に言及して提唱への限界を挙げながらも，海外を移動し続ける新移民の移民経験を反映した作品を描いた独自性，そして新移民自身が新移民を書くという行為を重視し，「新移民作家」という定義への可能性を主張した。

第6章では，アイルランド系アメリカ映画とアイルランド映画における特徴を考察したうえで，新移民をテーマとしたアメリカ映画とアイルランド映画5作品，すなわち『イン・アメリカ』(*In America*, 2003)，『2 by 4』(*2 by 4*, 1998)，『ゴールド・イン・ザ・ストリーツ』(*Gold in the Streets*, 1996)，『サンバーン』(*Sunburn*, 1999)，『ビヨンド・ザ・ペイル』(*Beyond the Pale*, 1999)を「新移民映画」と新たに分類して分析を行い，映像表現によって新移民の姿を再現＝表象したことの価値を強調した。

まず，アメリカ映画におけるアイルランド系移民に着眼し，これまで明確に定義がなされてこなかった「移民映画」や「エスニック映画」にジャンル論と映画作家論を援用することで，アイルランド系アメリカ映画の特徴を列挙した。この考察より，ギャング・マフィア，警察官や消防士などの職業もの，IRA，アイルランド系コミュニティ，主に四つのジャンルを複合したアイルランド系アメリカ映画の傾向を試論として呈示した。

次に，アイルランド系アメリカ映画と比較するべくアイルランド映画のジャンルの傾向も概観した。ここで，新移民世代のアイルランド人映画作家の作品にアメリカ文化の影響を読み取ることが出来た。そして，アメリカ映画とアイルランド映画双方の傾向を把握することで，「新移民映画」が両映画の特徴を合わせもちながらも，そのどちらにも分類し

難い独自のジャンルであることを第3節と第4節の新移民映画の作品分析から明示した。とりわけ，物語内外の音楽に傾聴することで新移民文化が聴覚的に表象されていることは特筆に値する。

従来，アイルランド系移民に関する研究は，歴史学と社会学の視座から19世紀から20世紀を中心に展開されてきたが，現代移民に焦点に当てた研究は希少である。本論文は，文学研究および映画研究において，「新移民」という新たなジャンルを提唱しただけでなく，包括的なアイルランド系移民研究の現代の区分を補完したことに，そして移民国家アメリカにおける現代移民の一集団の存在を呈示したことに意義がある。

論文審査の結果の要旨

本論文は、アメリカで1980年代に生起し1990年代に最盛期を迎えた「新移民」（New Irish）と呼ばれるアイルランド系移民の「エスニシティー」「同化」「アイデンティティ」の諸相について、入植当初から19世紀のピークを経て20世紀中葉に至るまでのいわゆる「旧移民」（Old Irish）との対比を視野に入れつつ、社会・経済的要因や宗教、さらに、文学作品や映画を研究対象として、その多面的実態を詳細に記述し分析した論考である。

第１章、第２章では、「旧移民」と「新移民」のそれぞれの歴史的背景を通観した上で、アメリカ社会における両者の社会・経済的特徴の形成に「ホワイトネス」（白人と認識されること）という概念がどのように影響を与えたかについて論じ、両者の接触が、「ホワイトネス」と「アイリッシュネス」（アイルランド人であること）という２つのアイデンティティの間の確執を生みだす過程について論じている。

これらの議論を踏まえ、第３章では、アイルランド系同性愛者のアイデンティティの表明が新旧移民の差異を際立たせた例として、セント・パトリックス・ディというアイルランド系の祝祭を取り上げている。しかし、この「排除」の構図は、同時に、「包摂」の力をも持つことになる。この両面的な方向性を、「みんな」の記念日としてこの祝祭を記述する児童書なども参照しつつ、明快に論証した筆者の手腕は審査員が特に高く評価した点である。

第４章で「ホーム」（アイルランド）との距離を埋めるメディア（新聞、電子メディア）や文化発信の場（バー、パブ）の実態を概括したあと、第５章では、新移民作家による文学作品を取り上げ、「帰郷」と「越境」という文学テーマに焦点を当てつつ、「ずれ」の問題及び「新移民作家」という定義の可能性と限界について詳細なテキスト分析を通して論じている。また、第６章ではアイルランド映画、アイルランド系映画、新移民映画、エスニック映画のようなジャンルの不透明性について指摘しながら、代表的な作品のイコンやモチーフを概観した上で、新移民像や舞台設定としてのアイルランド系コミュニティの表象を分析している。

第５章、第６章での文学作品と映画作品の分析には、作品に含意されている「アイロニー」や必然的に政治性を伴う「表象」行為への目配りが不十分であるとの指摘がなされたが、精緻で着実な論証がなされている点、および、とくに第５章ではこれまで殆ど取り上げられてこなかった作品が扱われている点など、文学研究や文化研究への貢献も認められるとの判断がなされた。

このように、本論文は、歴史学や社会学の文献調査と統計分析を駆使し、同時に、文学研究や映像研究のテキスト分析の手法をもちいてアイルランド系「新移民」の現代アメリカにおける様相を記述、分析しており、アイルランド系アメリカ人文化研究に、これまでほとんど研究されることのなかった「新移民」についての知見をもたらしたものとして高く評価できる。

以上により、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認める。